

昭和十年五月廿三日第三種郵便物認可（毎月一回一日發行）
昭和二十四年四月二十八日運輸省特別採承認雜誌第三五二號
昭和三十年五月二十五日印刷 昭和三十年六月一日發行

第二十一卷

六月號

淨土



六月號

信州・善光寺



浄土 六月號 目次

卷頭言.....(1)	史話 似顔繪師.....鶴田湛泉...(28)
宗教入門(2).....佐藤賢順...(2)	力と信仰.....中村 賢...(26)

特輯 信仰に輝やく人々

越中の妙好人.....戸松學瑛...(7)	死んだ倅は生きている眞野孝信...(18)
松岡さんの一家念佛...谷部 禪雄...(11)	信ずるは力なり吉原自覺...(21)
戦犯死刑者岩田光儀氏の 最後と其妻の信仰 ...佐山學順...(13)	念佛の生活.....山田鏡瑞...(20)
母を讃う.....伊藤宏天...(16)	愛情は母の心もて ...白幡静憲...(25)
	念佛信者治三郎翁 ...野々村學念...(9)



言 頭 卷

庭の飛石のへりに、小さい砂の山を築いて、いそがし氣に、穴を出入りしている蟻の群をみているうちに、フランクリンの言つた言葉が浮んで來た。

「蟻ほど上手に説教するものはない。然し、蟻はひと言も喋らない」

これから段々と暑さに向う。蟻の地上生活はますますいそがしくなる。一刻の休みもなく、一匹のなまけ者もない。蟻の世界はそのままが無言の説教である。「働け、働け、働け」と。

正直にいつて、私が蟻の姿を見たのは今が始めてではない。だが、その姿から、しみじみと「勤勞」の尊さを教えられたのは、こうやつて卷頭言の原稿を書くべく、考えをまとめるために庭に下りたからである。してみると、私共が、平常うかつに見すごし、聞き流していることのなかに、随分とためになることがあるわけだが、それが仲々に氣付きにくいのではないであらうか。

本月號は、現在第一線に活躍されている布教師の方々から、説教のサンプルを寄せて頂いたのであるが、それは、蟻の無言の説明に心付かぬ多くの人々のために、信仰に入る機縁たらんことを願つてである。それと同時に、自らの信仰、自分の抱く信念は人に向つて語るべきである。それによつて相手の心にも、自分の得た安心あんじんを植えつけてこそ、念佛道はまつたきものとなるのである。信仰はひとりじめにすべきでなく、喜びは分か合わねばならぬ。それには、何にもまして、分りよく、信仰の道を説き示めることが大切である。

若い人達に語る

宗教入門

第二講

宗教心



佐藤賢順

宗教は現實的と超現實的との關係であります。人間と人間以上との關係であります。ですからこれを、宗教とは人が神佛を信じその救いによつて現實以上の世界に生きることである、ということもできるでしょう。そこで、宗教を語るには人間、すなわち主體の方面と、信仰の對象、すな

わち客體の方面とに分けてお話するのが便利です。まず初めに信ずる主體の働きについて。

商賣繁盛や金儲けの願がけをして現世利益を求める不純な願ひの中にも、仔細に眺めれば、清純な宗教心ともいうべきものがある、ということとは、前にお話した通りです。強い弱いの差別はあつても、宗教心は誰れの心の中にも潜んでいるのです。法然上人は、

たとへば葦のしげき池に、十五夜の月のやどりたるは、よそにては月やどりたりとも見えねども

よくよく立寄りて見れば、葦間をわけて宿るなり。忘念の葦はしげけれども、三心の月は宿るなり。(和語灯録)といつております。これは近代的な細かなセンスで人間の宗教心を表現した美しい言葉であります。葦が一ぱい茂つてゐる池は、水の面が見えない位であつて、十五夜の月が

照つてゐる夜でも、その水の面に月影が映つてゐるとはつゝい氣がつかないのであるが、近くに立寄つて葦の間をそつと覗いてみると、月影が美しく亂れてゆらめいてゐる。オヤこんな所にも、月影が映つてゐたのかと意外に思う。丁度、われわれ人間の心というものも、葦に覆われた水面のようなもので、いつも雑念や妄心に覆われている。貪りの心や憎しみの情や、憂いや悲しみが絶え間もなく、あとからあとからと起きてくる。しかしよくよくお互の心を反省してみれば、雑念、妄念の起つては消え、消えては起るその心の奥底に、清らかな宗教心が、葦間に宿る月影のように、美しく輝いてゐる、というのであります。誠に私どもは思わぬ所で人の眞心に觸れたり、意外な人から親切を受けることが珍らしくないのであります。

忘念の葦は茂けれど三心の月は宿るなり、この三心というのは、三つの心と書いてあるように至誠心、深心、回向發類心の三つであります。今のことばでいえば、宗教心ということであります。初めの至誠心とは、誠の心、まごころであり、第二深心は深く佛の救いを信する心であり、第三の回向發願心は自分も他人も共によき世界に生れたいと願う心でありますから、これは一口に言つて、宗教心に外なりません。私共は日常、生活のために追い廻されて、生きるための仕事や、世の中の義理や、つきあいや、感覺的な欲望の満足や、借金や税金の苦勞などで、全く現實の

中にはまり込んでおります。心棒をなくした風車のように、風の吹きようで、どこへでも飛んでいつて、どこででもくるくと廻つてゐるのです。しかしこうした慌しい生活の中にも、何か静かな落つきを求める心持があります。日々に移り變つていく移ろい易さの中に、變化を超えた永遠なるものを求める願ひがあります。貪りや憎しみや怒りの心持の奥底には、清純な愛情が山奥の清水のように湧き出ています。

宗教心とは現實にあつて現實を突きぬけようとする心でありますから、厭離穢土、欣求淨土という言葉で言い現わすこともできます。これは現世を厭ひ捨て、淨土を欣い求めるといつても、たゞ消極的、厭世的に現世を逃れて未來の國へ生れたいというのではなく、現世的地上的な事に満足せず、現世を超えた世界に眞の心の據り所を求めようとするので、宗教心の方角を示してゐるのであります。それはかつてお話した聖徳太子の世間虚假、唯佛是真と同じことでもあります。

それならば、この宗教心はどのようなにして現實を突破して超現實に據り所を得るのでしょうか。人間は宗教的にはどのようなにして人間以上の對象と結びつくのでしょうか。

宗教の世界にはゐるにはまず日常一般の知性とか理性とかに頼ることを止めなければなりません。今ここに知性

とか理性とかいうのは人間的知性をいうので、お互が考えたり知つたり疑つたり決めたり喋つたりする働きであります。思慮分別するとか思案するとか取り沙汰するとか計^{はか}うとか、いうことであります。つまり毎日の生活でお互が使つてゐる働きです。日常生活ではそれがなければ、一刻といえども暮してはいられないほどに大切な働きです。筋を通して物を考える、實際上の経験を基にしてこれから先のことの見透しをつける。誰れにも通用するように話をする、といったようないわゆる合理性、首尾一貫性、妥當性というようなことが、知性という働きの特色であります。これを學問的に整理したものが自然科学であります。知性とは私共が日常、眼で見たり耳で聞いたりすることのできる對象だけについて、知つたり、考えたり、論じたりする働きで、このような考え方を合理的というのであります。ですから、こういう態度で、私どもの救済の相手である神や佛を考へても、それが把えられるわけはありません。そんなものは存在しないということになります。こういう考え方によりますと、例えば太陽を例にとつていゝますと、太陽は毎朝東から出て西にはいるが、それは地球が自轉しつゝ一定の軌道を通つて太陽の廻りを轉廻しているからそう見えるのである、ということになります。そしてたゞそれだけのことです。

では宗教的態度とは理性によるのでないとすれば、情感

の働きによつて對象に近づくのでしようか。人間的な情感とは、美しいとか氣高いとか清らかだとか感ずる働きです。から、無論この働きが宗教の世界にはいるについて大切であることはいふまでもないことですが、やはりそれだけでは宗教の世界は開けてこないのです。また太陽の例を取つて申しますと、黄昏時に太陽が山の彼方に沈んでいく光景を思い浮べてごらんなさい。頂を雪で覆われた山山の向うに、大きく赤々と燃えて沈んでいく太陽は、美しいとも莊嚴とも雄大とも感じられるでしょう。しかしそれは藝術的な感激ではあつても、まだ宗教的とはいえないのであります。

では道徳的に善い行いを重ねていけば、宗教の世界にはいることができるか、といゝますと、これも勿論、宗教生活に大切なことでありますけれども、それだけでは宗教とはいえないのです。なぜかといゝますと、人間の意志や良心の力で、どんな立派な行爲をしても、それは多寡が知れたもので、善い行いとか悪い行いとかいうのも結局は相對的な區別にすぎないからであります。結局、倫理の世界は人間的な世界にすぎないので、いかに善行を積んでもまだ宗教の世界にははいれないのです。かえつて何が善であり何が惡であるかをほんとうに定めるのには、宗教を據り所としなければならぬのです。

つまり理性によつても情感によつても善行によつても、それが人間的、日常的である限りは、宗教上の対象に近づくことはできないということになります。宗教の世界にはいるのには、人間的な立場を自己反省し自己批判して、そこを突き抜けなければいけないのです。人間的な理性を反省し批判して、人間の知識はどこまで届くことができるか、どこに限界があるのかを見極め、見限りをつけるというところまでいかなければならないのです。

知性は動物でも持つているかもしれませんが。動物でも外界について何事かの知識を獲ることが出来るかもしれませんが。しかし知性が自らの知性を反省するということは人間だけが出来ることです。これは實に偉大な知性の働きで、人間が宗教的な存在であるからこそであります。ソクラテスは、自己自らの知性を省みて、自分は何事も知らないということを知つてゐるものが、眞に知を愛する者（フィロソフォス）であるといふました。無知の知が眞の知であるというのです。人間が一生かゝつて知り得ることは僅かなことです。たとえ澤山のことを知ることができたとして、いかに知識を積み重ねても、人間の本性が變化するといふわけでもなく、心の不安が除かれて安らぎがえられるというわけでもありません。ゲーテがファウストにモノローグで言わせてゐる言葉は、生涯をかけて熱心に知識を磨き學問の研究に身を捧げたけれども、得るところは何物で

もなかつた、という述懐です。ファウストはこう嘆くのでした。

さてさてわしは哲學も

法律も醫學も

あいにくと神學さえも

熱心に勉強して蕙奥うんぐを極めた

そしてわしはこうして今こゝにゐる、氣の毒な愚か者だ
その癖、前よりはちつとも賢くなつてはいない

學士と呼ばれ博士とさえ呼ばれて

かれこれ十年もの間

學生の鼻柱をつまんで

吊り上げたり引き下したり、あつちへこつちへとこすき廻したりしてゐる。

それでもわし達は何も知ることができないのだとわかつてゐる

それを思えばわしの胸は焦げそうだ。

そこで彼は知識の世界をすてゝ魔法に身を委ねるという事になるのです。話は大變飛びますが、越後の國上山くがやまの五合庵に隠棲した良寛和尚にも、晩年、これと同じ述懐がありました。これは誠に興味のあることではありませんか。良寛和尚はこう歌つてゐるのです。

少年父を捨てゝ他國に奔る

辛苦虎を描いて猫もならず

箇中の意志人もし問わば

たゞ是れ從來の榮藏生

二十二歳で出雲崎の父の家を出て備中玉島の圓通寺にはいり、四十七歳までの二十五年間、大いに野望を抱いて激しい修行にも堪え難しい學問にも勵みました。しかし力には限りがあつたのです。「辛苦虎を描いて猫もならず」でした。そんなに勉強をして、お前の心持はどうだ、昔と人間が變つたと思うほど利巧になつたか、と聞かれれば、やはり昔のまゝの榮藏である、というのであります。榮藏とは良寛の幼名であります。

このように十分に知性を磨いた人はその人間的な制限を知るのです。ほんとうに學問をした人が知識の限界を知るのです。それは知識の方面においてばかりではありません。道德的な行いにおいても、つねに人間の犯す罪というものゝを反省して人間の道德的無力に氣づくのです。そして人間的な力に頼ることをやめて、人間以上の力に頼るといふことになるのです。これが宗教的な心の持ち方で、こういう人には、自然の出來事も社會の出來事も、すべてが人間以上の力の恩恵として受取られ、感謝をもつて眺められるのです。さき程の例をとつていえば、太陽が照り輝いてくれたお蔭で、寒い冬の日も暖く暮せたし、洗濯物もかわいたし、畑の野菜も大きくなつたといつて、有りがたく頂

くのです。太陽は天文學的な天體ではなく、繪畫や詩によつて表現される美しい日輪ではなく、萬物を生かし育はぐくむ慈光であります。信濃の俳人一茶は他力信仰の深い人でしたが、その句に

梵くほどは風がくれたる落葉かな

というのがあります。「風がくれたる」というような受取り方は、信仰の目の開けた人でなければできないことでありましよう。また同じ一茶の句に

雪の風呂南無阿彌陀佛と沈みけり

というのがあります。これなども大きな恵みを感謝して有難く生きている人の心境をよく現しております。(つづく)

(大正大學教授)

誌上暑中見舞廣告

本誌恒例誌上暑中見舞を交換致しますので、會員各位の御参加をお待ち致します。

宛先

東京都品川区上大崎一ノ七八二

法然上人鑽仰會

暑中見舞係

方法

ハガキに氏名肩書明記の事

代金

三百圓。七月號挿入振替用紙御利用下さい。

信仰
實話

信 仰 に 輝 く 人 々

越 中 の 妙 好 人

—宮崎 ヒナさん—



戸 松 學 瑛

(7)

蜃氣樓と蜚いかで有名な富山縣魚津市の西願寺で昨年七月、御本尊さまの御宮殿（ゴクウデン）新調御遷坐の大法要が三日にわたつて勤められた。日々の參詣は、さすがに佛教

繁盛な土地だけあつて、東京のわれらには一寸驚異的でもあつた。眞宗の門徒も本宗の檀徒もそんな分ちなく、唯南無阿彌陀佛の聲の合唱、老も若きもよくそろつた。この年開催

された富山の博覽會見物に來た多くの人々も天然記念物の埋没林の原始姿や、水族館の生きのよい所を見て好奇心を、そゝられたであらうが、念佛ありがたやの聲々や容子を見聞しては一段と心の眼を見張つたことであらう。

それはさて、このお寺の早朝、つり鐘の音の響き渡るころ、本堂に只一人、ナムアミダブツ、ナムアミダブツと小聲に稱へながら、すり足で、うすくらやみの中を、先づ御本尊觀音、勢至、兩大師、住職代々さま、先祖のお位牌と次々に巡拜しておる老婆があつた。白髪まじりの瘦ぎすの七十見當の田舎風のお婆アーさん、そのお婆アーさん、時々合掌の手を目頭に當て、涙を押さえる容子を見て、

私は殊勝の者よと、昨日も今日もそのまゝに打ち過ぎたが三日目の朝、住職長谷川善務上人に仔細もあらうかと聞いて見た。

ああ、あのお婆ちゃんですか、あれは二三里はなれたへんびな村里に住んで居る檀家の宮崎ヒナと申す者で若い頃から信心深い女で早く夫に別れ又惣領息子は戦死する、二番目は山の仕事に出稼ぎ中、崖崩れのために不慮の死を遂げ、今は末の子供にかかつて居る身の上ですが氣丈の女で、家の手傳、野良仕事孫の守りもする。これは田舎の當り前のことですがその間に戦時中は勿論昨今でも相變らず自分を忘れて遺族の面倒、未亡人の世話などやいて薄幸の人々を次から次へと慰めることを喜んで居るのです。現にこの度當寺の御宮殿新調はこのお婆アーちゃんの發願で戦死者の家族に先づ呼びかけ、零細の喜捨を基として始めたのがみのったのです。毎日／＼草鞋がけ、手辨當で遠近を説きまわり、貧の一燈、長者の萬灯と觀進帳を持ち廻り、果ては檀家總代世話人をも共鳴させ集め得たる淨財數十萬金、永い月日の苦勞が酬いられて、この立派な御宮殿が出来上り奉納されました

——。
聞くも嬉しい又涙ぐましい宮崎ヒナさんの活動振り、この菩薩行は英靈その他十萬檀信の限らない法悦をたゝえて末永く西願寺の本堂に鎮座することであらう。そこで私は早速三日目の朝、おまゐりのすんだお婆アーさんに聲をかけた。

お婆アーさん、よくおまゐりなさいますね。よく働くからお達者なんですね。殊に今回のお働き兵隊さんなら殊勳甲、あなたは第一日の式に御住職から表彰されましたね。阿彌陀さまも善女人、妙好人とおほめなさつて居られましたよう。それにつけても朝早く、誰も居ない本堂であなたはジーンとおまゐりをして居られますが、深くお察しいたします。戦争ではお氣の毒な人が澤山出来て何とも慰めようありません。おくれ先立つ浮世のならひ、これが娑婆です。阿彌陀さまが、よいようにお護り下さいます。御住職から御家庭のことを伺つて心から同情して居りますと、なかば慰安の言葉をかけました。すると宮崎さんは軽く會釋して、いやなに、私の働きたどは何でもありません。私は如來さまが有り

がたくて、こうやつて手を合さずには居られないのです。如來さまを拜んで居ると自然と涙が出てまいるので自分でどうしようもありません。如來さまは本當に有りがたいお方ですよと何の不思議もなさそうに應えるのであつた。

旅の僧、私は此國の風物に接するの心もちから、いささか信仰談にもふれて見て、傳統的に信心深いという越路の佛教信者のあり方を管見してみたいと思つた。宮崎さんは口數すくなに別段お話することはありませんが、私は先程あなたさまから慰めのお言葉をいただいた通り頼りにした子供を相次で亡くしましたことは悲しいことではありますが、サッパリとあきらめさせてもらひました。おかげさまで、どうにか安心な日を送つて居ります。私どもが困つた時には政府が見殺しにはして置きません。役所も民生委員さんも、御近所も、又は親戚知人も骨折つて下さいます。死ねば葬式も、埋葬もして頂けます。けれどもそれから先きのめんどうは誰れが見て下さるでしうか……と膝のり出して、言葉をにつけ、如來さま佛さまより外に頼るお方はあり

ません。死んだ先まで助けて下さる御慈悲を何で有りがたく思はずに居られましょうか。

南無阿彌陀佛、助けて下さい阿彌陀さまと心から申上げると思はず涙がにじみ出るのでございます。本當に阿彌陀如來さまは極樂にもいらつしやいますが、現に此處にも、私の貧しい家の内にもいらつしやいます。いつもお救いを頂いて居る私は本當に嬉し涙を出さずには居られないのですと、何氣なく話してつていそいと庫裡の方へ立つて行つた。參詣者のお取り持ちが始まるのであらう。ふと私は

情けには靈邊にまでこそ送れとも

墓の下には訪ふ人もなし

の歌を思い出し、素朴なこの宮崎さんこそ、宗祖法然上人さまが愚鈍念佛往生第一の機と御沙汰なさる妙好人ではなからうかと隨喜の念を禁ずることができなかつた。

この年陛下、博覽會へ御幸の砌、遺族席敷珠を手に、合掌念佛申し乍ら陛下を來迎して居つた宮崎ヒナの前で、陛下は御足を止めてお聲をおかけ下さつたとか、長谷川老師のお話を承つた。うれしいにつけ、悲しいにつけ

只一向に念佛するこのお婆アーさん宮崎さんは今もなほ日々好き日を、有りがたい日を送

つて居ることであらう。

念佛信者治三郎翁

野々村學念

京都驛を朝五時に發車して山陰線を西へ凡六時間で岩美驛に着、丸合バスで北へ一里半

る。居間佛間にも暖かく爐の設備があつて年一度の楽しい法要となつてゐる。

網代港が終點である。此邊は山陰松島と云はれ大へん景色の美しい所である。同時に彌陀信仰のよく育つた優しい人情美豊かな土地である、年々舊正月六日頃から元祖大師の御忌

此土地が斯様に淨土教の盛んになつたのは古德の懇切な指導と相俟つて土地の人達が純眞熱心であつたのは勿論であるが、就中信者

會がつとまり御命日廿五日頃迄引續いて勤ま

治三郎翁の發起が因をなして居るといふことである。

る。雪の多い年など三尺から四尺積る。雪を頂く島々に日本海の荒浪が打寄せては波の花が碎け散る、そんな日程參詣も賑やかであ

治三郎翁は嘉永二年生れで九十余才といふのに腰一つ曲らず杖もつかず高下駄を穿いて毎日聽聞に通ふ、熱心に話をきく布教が終る

と居間へ訪れて来て四方山の話をして歸宅するのが常であつた。此翁は五十七才頃に伴の豊治に世を譲り、自分は隱居をして念佛の傍ら御經を學んで暮したいと思ひ立ち、京都へ出發、祇園社前の豊田愛山堂で赤表紙の小經を一冊求めて懷にし總本山へ參つた。山下大僧正に拜謁、山下大僧正は十念を終るや

「治三郎殿あんたは懷に何を入れてゐますか」

「ハイお經様でございます」

「こちらへおかしなさい」

「ハイ」

といつて差出すと

「はあ阿彌陀經ですね、あんたはこれをごうするつもりか」

「ハイ私は伴に世をゆづりました之からこの御經を少しづつ覚えて隱居生活がしたいと思ひまして」

「それは駄目ですおよしなさい、人間は年をとると右からきいても左へぬけて了うものである。御經は一字間違うても功德はありません、此經は私が預かつて置きます、そのかわり之れだ、この合掌と御念佛ならば間違

へる心配も覚える世話もない」

「では管長様は御念佛だけで御濟度でございますか」

「そうです、念佛だけが大切です。このお念佛には攝取不捨といふ如來様のお育てとお教ひの徳が具はつて居ますのじや、船乗りが家業ならたとひ網打つ時も南無阿彌陀佛と申し乍ら網を打つのです、すると魚も喜びますぜ老人になつて隱居の身になつても淋しい日悲しい日もあるものだが、どんな日も合掌とお念佛でやりぬきなさい。夜のねざめにも念佛です。外のことにかぶりを堅にふつてはなりませんぜ。」

「あんたの家は根から淨土宗か」

「ハイ私の家は網代から南へ一里半にある浦富町定善寺の檀方で先祖代々淨土宗でございます」

「では一枚起證文は御承知じやうな」

「ハイ一枚起證文は若い頃から覚えて日々拜讀して居ります」

「ではたとひ一代の法をよく／＼學すともとある、あのともといふのはどういふ意？」
「ハイどうもはつきりしませんので」

「ともといふのは擱んで居たものをふり離すといふことだ。只一向に念佛すべしとあるあのべしというのは何の意？」

「ハイどうもハッキリしませんので」

「べしとは一旦つかんだら生涯放さぬといふことじや。だから御經は預かつて置きます合掌と念佛で暮すことが一番大切です。」

翁は山下大僧正からこの尊い教をうけ、元祖大師の御影を頂き國元へ歸り友の山下龜十翁と協力して念佛信心講を結び、京都三條いろは會館を常宿と定め年々京參りも獎め年を経るにつれてだん／＼盛んに營まるやうになつたのである。

所が人生は盡ならぬものである、伴豊治は病氣となつて逆に翁はその介抱をすることになつた。

「豊治や今日は駄の調子はどうじや」

「今日は大へん樂になりました、年老つた父さんに心配ばかりかけてすみません」といつてふとんの襟に顔を埋め、向ふをむいて泣いてゐた。

「豊治や、そんな事は苦にせんでシツカリ養生して早く丈夫になるんだ」

といふと翁の方へねがへりをしてその顔をジッとして居たが……そのまゝ五十三才で命を終りました。急に家の柱を失ひ五人の孫娘を引受けて翁は泪のどん底へ陥込んだ、しかしこゝが山下大僧正の教だと思起し、佛壇のふちに額をあて合掌念佛に泣明した朝は幾朝も續いた。

之を見て立上つたのが五人の孫娘である。

五人の孫娘はどこまでも年老いたおじいさんを安心させにやならぬと協力勤儉力行の四字で數年ならずして立派な住宅迄建直し、夫々縁付き、翁に手當ても捧げるやうになり、一時途方に暮れた翁も再び氣樂に暮せるやうになつた。

山下大僧正百一歳の折久方振りに京都へ参り大僧正に面謁、十念終つて

「私も年とりましたが治三郎殿あんなも年とりましたな、どうじや合掌に念佛は」と尋ねられ、念佛に明け暮れたことを話しますと

「結構、先年預かつて置きました御經本日は返しますぜ！」

といふて直筆名號を添へて賜はりました。

昭和二十二年正月になるとすつかり躰は衰へ、五日頃より清水で口をそそぐばかり、八日、娘に善光寺の桑の數珠をかけて貰ひ、有がとうと三度額に合掌の手をあて、何か云ひ残すことはないかといはれて「この年まで長い間生かして貰ふて、何もいふことはな

いわいな」といひ、南無阿彌陀佛と二三口唇が動なくなり、そのまゝ安らかに眠りにつくが如く最後の息を引取つた。時に九十六才、山陰松島の海邊に咲く淨土門信仰の華、念佛信者治三郎翁こそは未永く世に弘く語り傳へたいものである。(昭和三十年五月記)

松岡さんの一家念佛

谷 部 禪 雄

終戦後新興宗教が雨後の筍の様に發生し吾も人もと流れ行き已成宗教に、日没の觀が有るとか。佛教を嫌ひ基督教や教派神道の群に投入する人々の多き事よと如何にも羨しげな顔つきをする人々等種々の問題が論議されております。無論我が佛教界の猛省が促される事も確にその通りで吾々も内心努力精進の足らざる事を慚愧しております。

併し、長雨が續きましても何時か太陽の燦々と輝く日は必ず來るものです。正法の輝き

は決して消えたものではありません。私が毎月一回御回向に御伺ひしております御家(松岡汽船東京支店長)の御家族一同の法悦生活を御傳へして共に隨喜し度いと存じます。

此の御家族は老夫婦(二人とも七十過)に若き未亡人(三十四才)御嬢さん(小學校六年)坊ちゃん(小學校三年)の五人暮しですが御家族揃つて純正な念佛の一道なのです。香華燈御供物も清淨で雑多でなく小量で併も整つて、木魚袱鉦も具備されており、御一家揃

つて最初から最後迄で私と共に誦經念佛、特に嬢ちゃん坊ちゃん可愛い念佛の聲が私共の心を引き立たせ時間も忘れるといった有様です。

此れは老夫婦の董陶は申す迄もなく未亡人の優しい家庭教育の良さは無論ですが、祖母念佛申せば母も又稱ふ故に子等も之に倣ふ。洵に以て尊き家庭自然に頭が下ります。

さて私が御伺ひ致す様になつた御縁は今より五年前若き未亡人（松岡汽船有爲の青年社員）の主人急逝の時からです。普通から申しますと、親も妻も取り亂し、愚痴の涙の明け暮れ遂には何々の祟りなど申して邪教の良き餌になるのが此の時です。

然るに此の老夫婦日頃の堅き信仰が眞價を現したのです。此れ皆宿業なりと泣くな老妻よ、泣くな歎くな娘よ、自分も泣き度い悲しい、併し、此れが現實の世の姿だ残つた子供を孫を育て生かし守る事こそ、後に残りし私共のつとめであり往きし者への義務である今は詮なし只冥福を祈る事だ、只念佛より他に道なしと勵す老父の心中は、まことに

笑顔して人目を飾る苦しさは

泣くより勝る思ひなりけり

でありました。

野邊の送り満中陰、一周忌、三回忌と、次々の営みはまたたく間に迎へては過ぎ己に五年後の今日相變ず念佛の一族であります。淋しい中からも屈せず嘆かず愚痴らず御陰様でと協力同心の姿は涙ぐましい慶であり羨い限りであります。

ところが二年前坊ちゃんが教育大學附屬小学校へ入學された。その喜びも束の間、学校の飯途都電安全地帯で電車を待ちつゝ學友と語り合ふ折しも折、友と友の押し合ふトバッチリを受け、安全地帯外に突き出された瞬間タクシイーが出合頭、アット思ふ間もなく左眼をタクシイーのドアの引手に觸れ擦過傷を受けた。百方手を盡せしが遂に左眼の失明となりました。洵に一家の悲嘆言葉なく、御心中如何ばかりか。此の事を耳にした私、暫し言葉に窮しました。

後日御隣り御夫人同情の余り、先きには御父さんの御死去今坊ちゃん御災難何かの祟りが有るのではありませんか如何でせう某教團に御入會になつてはと勧められる事幾度か

併し其の都度「御親切は誠に有り難う御座います、斯くなるも皆約束事祈る事願ふ事より災難の小なりしを喜び御禮を申上げております、私共の日頃の信仰は神佛に決して無

理な御願ひを致さぬ事にしております、今日も有り難し此れでよかつた思ふにつけ、御陰様でと御禮を申上げております、大難が小難で過させて頂きましたと唯それだけです。人力盡して御陰を喜ぶより他は御座いません」と申しておりますとの御言葉でした。正しき信仰、其れは難中の至難であります。金が欲しい、地位が上り度い、權力を得度い、不振を取戻し度い、病氣災難が來ぬ様に、と願ふ心は人間として誰れでも欲する處であります、勉め勵む事を忘れ、又養生の中から其れを一筋に宗教に求めると云ふ處に問題が有るので御座います。

眞實の宗教とは自分と云ふものを良く見極める事で、外からでなく内から自分を常に見る事です。自身は現に罪惡死の凡夫なり」との大先徳の御言葉の通りです。浅い信仰其れは淺瀬の荒波です。私は何々の信者ですと自慢顔、いやなものです。

深い信仰其れは深淵の靜かさであります。

深山木の梢は其れとわかねども

櫻は色にぞ現はれにける

念佛者は平常時には何んでも無く見えますが一度何にかに遭遇した時に流石はと衿を正し度くなるものです。智者の振前をせずして唯一向に「の御言葉を心から味ひませう。



戦犯死刑者岩田光儀氏の最後と

其妻の信仰

佐 山 學 順

次ぎの文は 岩田氏の死刑に立會した時の報告書である。

日本戦犯辯護部クハラ、ランブール

駐在 教誨師 佐山學順

死刑者 故陸軍歩兵大尉 岩田光儀明治卅七年十月廿七日生 本籍 廣島縣安藝郡江田島、留守宅 山口縣宇部市東區旭町二丁目仁井方 岩田松代

右岩田大尉はマレイ、クハラピア警備二十五軍第十一連隊長渡邊大佐の下に勤務し昭和十七年三月十七日 パリチンギ町に於てマレイ肅正の任を受けて不逞徒黨を處分したるにより 英國側の起訴する所となり昭和廿二年九月廿二日より 同十月十三日に至る間クハラランブール戦犯法廷に於て懸樋辯護士の努力の甲斐なく絞首刑に處す

との判決あり 同十月十四日減刑歎願書提出せしも 昭和廿三年一月二日午後七時處刑せられたり

小職は一週二回の許可日には、同氏に面會し法話をなし、書籍用品の差入をなした、元日といふに刑務所長より會見して欲しいとの事いやな豫感の下に面會せし所明二日午前七時岩田大尉の絞首刑執行に就き本日は本人に會つて宗教的安心をとの注文であつた。辭して死刑囚のP舎に本人を訪れた。そして愈最後の段階に到達せる事を告げた。別に驚きの色もなく、豫期する所であるからと平靜に其所信を語られた。一應辯護部に引返して、例の如く辯護士通譯教誨師の贖金によつて、今生最後の御供養と、上等米で御飯を、支那味噌

ながら汁を、燒肴に刺身、甘いもの飲みもの酒は許されぬが煙草二十本を携へて、面會し最後の晩餐を共にした。其時は悟道に徹した岩田君は童兒の晴々とした朗さで、感謝の中に、甘味いうまいと一箸毎に、人間最後の食事、私も胸せまる事であつた。食事の最中に空氣窓から、聲が洩れて來た。「岩田さん、元氣で行きなさいよ さようなら」最後の面會も許されない戦友が、聲を便りに餞する愛情である。岩田君これに答へて「有難とう有難とう 皆さんによろしく 元氣で行きますよ」と。さしもの御馳走も皆平らげ、豫定の時間が來たと看守に促がされて辭去した。翌朝 五時起床 浴槽に身心を洗ひ清め、軽い朝食を取り最後の斷を待つて居る所へ、立會の爲めに訪問せしところ、發願文にある

通り、命終の時に臨んで、心顛倒せず、心錯亂せず、心失念せず、身と心に諸の苦痛なく身心快樂にして禪定に入るが如くとある實體を見て信仰の尊さを體驗する者の悦を深く感じた。岩田君は、身はたとひ、南國の土に埋もるとも、還相回向と、我が靈は日本を護り妻子の幸福を見守ります。お陰様で樂往生が出来ます事を御禮申上げますとて紙片二種の歌を示された。

雨もやみ風もなきたりさはやかに 朝日を浴びて明日といでまし、

今日こそは晴れの旅路を彙はすみて朝日かがやく南國の空、

折柄十人餘り係員が来る、七時十分前、名前を呼んで、相違なきを確かめると、これより死刑を執行しますと、最後の斷、つれない獄卒が着換を持ち入牢した。色のあせた洗ひざらしのシャツとサルマタ、これが死出の山路の装束である。手は後手に廻されて錠がかけられ、薄茶の頭巾が眞深にかぶせられると兩方から腕を取られ、絞首臺へとつれて行く。教誨師は誦經して最後の見送りをなした。十三階段も元氣よく上り終つて、愈絞首臺、足が紐で結ばれ、天井よりの縄が首を二重に捲きつけらるゝと岩田君、腹の底から 天皇

陛下萬歳を三唱する。一大音響 バターンと奈落に落ちる様に、そして階下の中間に最後の息を引取られた。私は、お淨土へ参りませ再び日本に歸りませと念佛の中に回向した事である。

生きとし生けるものの苦の根本は釋尊の觀ぜられた通り、生老病死の四苦と、愛別離苦等の四苦である。特に岩田君の獄中の惱は、死苦と愛別離苦である。生者必滅、會者定離の理は何人も知つて居る事乍ら愈死刑の宣言を受けた岩田君の死の惱は深酷である。四十三歳といへば未だ春秋に富む身、死を嫌ふ心の最も熾んな年輩である。まして個人的罪ではない、山下將軍がシンガポール入城以來、不逞の徒が、各地に蜂起し、日本軍の作戰を妨害し特に山下將軍の心情としては少數の不逞の徒輩の爲めにマレイ六百萬良民の安寧秩序を亂す事は不届である。皇軍の名譽にかけて嚴重に肅正せよと、命令一下、各地の憲兵隊の活躍となつた。岩田君も不眠不床の活動をした一人である。一は以つて國の爲め、他は以て地方良民の爲であつた。人間善い事をして悪い報を受くる事は死を惡む心と共に諦められぬ惱である。第二の惱は、愛別離苦、

故郷は愛妻と三人の子供がある。夫婦親子の情愛は格別のものがある。妻にも一度今生に於て會ひたい、可愛い、我が子の顔も見たいもう會う事も出来ないと思へば、夢に幻に面影は明滅する。私は數回に亘つて説法した。

天地には大なるお恵がある。それは不可思議の恵である。人間は此の恵によつて生を受け育てられ、人生を喜び樂ませていただく事を感謝せねばならぬ。日月星辰、山河草木、鳥獸虫魚皆これ天地の恩寵と喜ばねばならぬ。特に人間には他の動物と違つて佛性即ち理想を追ふ力が與へられ、正しい判斷を以つて如何なる惱も解決する事が出来る。理性で解決し得ざる時は信仰の力で解決が出来る。結局、人間は天地廣大なる御恵の存在を信じ感謝の喜びに人生を送り一切を擧げて天地のお計ひに任せる事である。生ある間は此の恵に抱かれ、死といふ一大事も、此の大いなる不可思議の御力に「あなた任せ」と信頼する事である。佛教では此の御恵を大慈悲といふ此の大慈悲を信するが故に、觀經にある通り佛心者大慈悲是也と佛在ますと心得て、御佛の御加護の下、生を喜び、不可思議なる佛力に信頼して往生淨土の未來の希望に生くる。生きても死んでも、佛を信するものには、眞

の悦である。天地は時間的にも空間的にも、無限である。佛も無限なるが故に無量壽佛、無量光佛と仰ぐ。私は阿彌陀佛の大慈悲、不可思議なる本願力によつて永却に救はれ、成佛する事によつて、人生五十年の小生命より無限に生きる大生命の中に、永遠に生かされる喜を感じる。

妻子への思慕は、當然の事ではあるが、どうせ早晚、愛別離苦に悩まねばならぬ。念佛の信仰に生きる人は、極樂往生を得るからには愛する妻子とも、彼國に於て、永遠の契りを喜ぶ。法然上人の歌に、

「露の身はこゝかしこにて消えぬとも 心はおなじ 蓮のうてなに」とあり、

法然上人七十五歳にして御難、なげき悲む弟子達に「たとひ師弟同じ都に住すとも娑婆の別は近きにあるべし、たとひ遠國隔つても浄土の再會何ぞ疑はん」とおつしやつた。このように浄土の信仰に生くる人は永遠の喜がある。と。

死に直面した岩田君は凡夫である限り、惱んだり、悟つたり、晴れたり曇つたりもあつたが、最後の日の前日は、前述の通り、無我の境地浄土往生と還相回向の信仰に微笑を以て永遠の旅に行かれた。最後の一句に曰く。

入るは今ぞ 草葉の蔭も花と花

教誨の大任を果して、夫々遺家族に遺品辭世の手紙詩歌を、そして最後の情況を報告したが、特に岩田夫人松代さんより寄せられた手紙は私を如何に感激せしめたことであつたか。其信仰生活の典型たる賢母良妻に、大なる尊敬を捧ぐるものである。其手紙に、

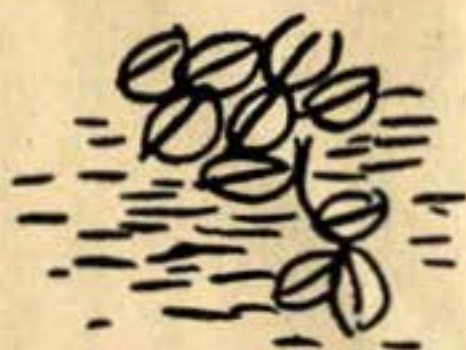
謹んで一筆申し上げます。此度は無事任務を終えさせられ、御歸國遊ばされました事衷心よりお喜び申し上げます。承はりますれば、御在任の節は、岩田が一方ならぬお世話に相成りました。何とも御禮の申上げ様もあります。岩田は必ず歸つて來ると信じて居りました。然し思ひもよらず、死刑を知らされ、一時は何かの間違ひではないかと思ひましたが既に一月二日に刑場の露と消えたとなりましたのは二月も半を過ぎた頃で御座いました。最後は、どうであつたであろう、安心決定が出來たのであろうか、唯々その事ばかりが心配で御座いました。戦地に向ふ時、少しでも私が、佛様のお話を致しますと、餘り氣に入らない様子で御座いました。心にかゝり乍らいう事も出來ませず、此儘別れになれば、未來も

別かと怨んで居りました。御手紙によりますれば、教誨師様の御教化に預り、岩田も聞かして頂き、悦ばせて戴く事が出來て、何といふ幸を得た事であらうと、思はず、御念佛を唱えさせて戴きました。世に生を受けし者、おそいか、早いか、必ず、死なねばなりません。救はれて、永遠に生きさせていただける者こそ、無上の幸福者で御座います。岩田は私に、人間生き甲斐のある仕事を残してくれました。女一人男二人の子供を一人前の良き日本人に育て上げる大任を、子供等の爲に、炭鑛の一女工として働いております。多勢の中での勞働、口さがなき批評、經濟上の悩まもありますが、一には亡き夫への手向け二つには子供等の生長を樂に、一生懸命働らかして戴いて居ります。一生の間に、一度は教誨師様にお會ひいたし、岩田に御聞かせに預りました事、私にも御教化していただきたいものと思ひまして、其時を樂しみに働かせていただきます。

岩田 松代 拜

この様な宗教的な、忍從精進の生活、法悦觀喜の日暮し、誠に現代稀に見る妙好人と謂つべきである。

母を讃う



伊 藤 宏 天

貧しきに生れ無學に育つた母の生涯中には、煩いも繁く缺陷も多いことであつたろうと思われる。然し、濃尾一帯の地方色として「篤信」に育てられて居たことは、吾等七人の兒女に取つて最大の幸福であつた。其の最後を知人に報ずるに「貧しき生涯を豊かな法悦に暮した母が七十九歳を以て……」とした程に、吾等の母は「篤信」であつた。幾多の醜いあしあとも、今は名残り無く掻き消されて日と共に、其の美點のみが浮き上り、無性に懐しく慕われる。

信ずることと働くこととは、濃尾一帯の傳統的美風であつたとは云え、母が生涯を通じて、よく信じ、よく働いたことは、母の生ける教訓であつた。

地方的傳統に従い、二兒を佛門に送つた甲斐あつて、五十五歳以後は寺庭に起居して三寶に給仕する身となり、殊に古稀に及んでは全くのらくいんきよで、諸方から花の苗や種を頂いては、氣隨氣儘に其れを育て、咲いたお花を朝毎に佛前に供えて楽しんだ。更に、寸陰の冥加を重んじて「屑いとなぎ」の仕事を、臨終の三日前まで、缺くこと無き日

課としてつづけ、不斷念佛の中に法悦の餘生を完うしたのであつた。母の面かげとして、喜壽の記念に撮影した「十六ミリ映畫」一卷に記録してある中の「日日のつとめ」が其の場面である。年々十月九日の祥月命日には一族相い寄つて、佛前に上映して生ける教訓を新たにすることにして居る。

母の信仰を語る法句としては「冥加」の二字が最も適切であると思う。時の冥加、身の冥加、物の冥加を如何に敬い尊んだことか。従つて時を生かし身を生かし物を生かして念佛生活の實績をいよ／＼豊富にしたのであつた。遊手徒食ななどと、そんな六ヶ敷い理屈を無學な母の知ろう筈は無い。然し篤い信仰は無性に其れを恐れさせた。事實、母は遊ぶことが嫌いであつた。

「達者なからだで三度の御飯を頂く以上、何なとさせて貰わにや濟まんね」
日に何回と無く繰り返した。懐しい言の葉が、二十年も立とうとする今も尙お耳のほとりに漂つて居る。「冥加」の法句に母が身を以てほどこした註釋である。と同時に念佛をかみしめて得た醍醐味であつたであらう。

今は敷島紡績となつて居るが當時の帆布工場の屑糸を、一手に取り引く山龜商店へ行つて乳母車に一杯積んで二貫目ほど。其れを、間がなすぎがなつなぎ續けてお賃が五十錢ばかり。出來上ると車を押していそ／＼と草津の町へ。當初、私は其れが人目に立つのを非常に恐れた。老いたる母にお小遣いさえ不由させて置くに見える。ひどい奴だと思われはせぬか。

「お母さん、其れくらいのお小遣は私が上げますから、世間ていの悪い、其んな賃仕事は止めて下さい」

と、何べん乳母車の手をおさえようとしたか知れないが、其うした私の耳に直ぐひびいて來るのは

「達者なからだで三度のごはんを頂く以上何なとさせて貰わにや濟まんぞね」

何にも錢かね目あてにしては居ぬ。小遣はしけりやお前に呉れと云いもする。一寸二寸の屑糸も捨てゝ置いては死んだも同じ、斯うして置けば二度も三度も役に立つ、これぞ佛の精神なりと、説教する身が説教された氣に成つて、其れから後は幾度か、草津の町の入

口まで乳母車を手傳つたのであつた。

夕食後、日が暮れてからでも直ぐには寝ない。「達者なからだで三度のごはんを頂く以上……」と云い出すので、子供等がくす／＼と笑い出す。笑いに答えながら「其れじやとて何なとさせて貰わにや濟まんぞね」と隠居所の大きな電燈をつけて糸をつなぎ出す。電燈のメートルはずん／＼上る。糸のつなぎ賃より電燈代の方が高くつく程である。若し世帯主としてそろばん勘定をするなら、何にもせずには寝て居て呉れた方が幾分でも得なのだが、幼い兒等への生ける教訓は千萬金にも換え難い。

母は病床に就く直前まで、朝毎のつとめとして手作りのお花を本尊前や碑壇へ供養した。私は母が尊い阿彌陀經まんたらを織るもの隨喜合掌した。母が此の世で働く最後の姿が是れであつたとか、而も臨終の三日前、朝毎のこのつとめをすまして床に就いた由。私は長野縣各地の巡教中にて、臥床の報より先に危篤の電信を受け取つて、急遽飯つたものの臨終の間に合なかつた。飯り着いた時は既に數時を経過して居た。美わしの死に顔、

母は訖度、お淨土參りをしたと堅く思い定めた。其れよりも驚いたことは、この母の枕頭で近親の女四人が、念佛稱えながら、せつせと糸をつなぎをして居ることである。私は挨拶よりも先に、主人らしく「今晚あたり、其んなことせんでも良いでしょう。お葬式の準備もあるし……」片づけなさいと命ずるように云うと、四人の女は異口同音に

「是れがお母さんの遺言でした」と云い乍ら手も休めずに、鼻をつまらせて居る始末。様子を質すと臨終の直前、口のきける間に、姉共に向つて

「わしが死んだらナ、つなぎ残しの糸のかたまりが三つあるでナ、夜伽の晩に枕もとでつないでお呉れや」と。

何とまあ、吞氣な遺言であらう。否、尊い姿であらう。私は改めて母の遺骸に合掌した。遂に近親五人は逝きし母の枕邊で、残りの糸をつなぎ明した。

母の口から娘の耳へ。姑の口から嫁の耳へ。女から女への遺言で「冥加」の法句を生涯の身を以て註解した糸の遺言である。心の糸や道の糸、つなぐ教えの法の糸、イトウの家に

残された、イトの訓えの語り草、伊藤の母の血を受けて他家へ縁づいた二人の姉と、他家に生れて伊藤の家を相續する二人の嫁に「忘れて呉れな」と母が形見の教訓であつた。

來迎佛のおん前に、寢たままの母の遺骸を圍む娘二人に嫁二人、逝つたものも残つたも

のも、この場合、心一つに相續するは、つなぐ教えの法の糸、其の尖端は來迎佛の御手にかけて、五色に映えるお手引きの糸の教えになぞらえて、導き玉え、彌陀の淨土へと願いつづけた。

念佛の聲もかすかに、引き入れられさうに

なる心を強いて引き立てんものと「夜伽に夜なべ」と漸くゴロを合して笑顔を作つて見たものの、心の底から笑える者は一人も無かつた。斯くて夜伽の夜なべで、貧しい母が此の世の結びをつけたのであつたが、また、豊かな母の永生を壽はく最初の貢でもあつた。

死んだ倅は

生きて
いる

眞野孝信

「お上人さまも船にお乗りでございますか。」

「はあ、私は徳島へゆきます。」

「京都からお下りで。」

「ええ、京都です。お婆さんは？」

不意に隣に腰を下して居た見知らぬ老婆から聲をかけられて、私は讀んで居た新聞を膝においた。

「私も、よんべ（昨夜）の船で京まいりし

まして、清水さん（清水寺）から圓山公園、

それから御本山（知恩院）へ廻りまして、それから立派な電車道を通つて（四條通り？）、にんにやか（賑やか）な活動（映画館）や店のあるところ（新京極）を見て來まして、今四國へ歸ります。」

「そうですか。それはよかつたですね。でもお婆さん、お疲れになつたでせう。夜行でいらして、一日中京見物とお参りをなさつてまた此の船じやね。」

「お陰さまでな、この嫁が倅のよめですが」指をさゝれてその隣りに話を聞いて居た三十才位の素朴な田舎娘の感じのする婦人が突然紹介されて會話した。

「一諸につれてくれましてな、いろ／＼大

事にしてくれますので、一ぺん京へお参りしたいと思つて居ましたが、死んだ伴が生きてゐるようです。」

指で眼頭をおさへながら、ありし日を追憶するかのやうに

「わたしは此の戦争で一人息子を死なせまして、……」きらつと兩眼に光る雫を拂ひながら老婆は、「息子が『一ぺん京へつれてやりたいのお』とよく言ひよりましたが、……戦争に行つて死んでしまひました……。」と言ひ續けると、こらえかねた涙が溢れて手を傳つて膝におちた。

善逝はこれを宜ひて又かく宣へり

「善き人々は云ふ、第一に美しく語れ、

第二に如法に語り、不如法に語る勿れ。

第三には優しく語り、荒々しく語る勿れ。

第四には眞實を語り、偽を語る勿れ」と。

(相應部、有偈篇八の五「善説」)

「お氣の毒でしたねお婆さん。でもお婆さん、お嫁さんがこうして親切にして下さるから、お仕合せですね。」

ハンカチを袂にしまひ込んだ老婆は

「田舎の貧乏な百姓は、京参りと申しても仲々大へんです。此の嫁が、毎月少しづつ積立てゝくれたお金で、京参りにつれてくれました。伴もきつと、何處かで喜んどりますわな、もうし。」

「そうです。息子さんは何時でもお婆さんやお嫁さんと御一緒に居られますよ、ね。お婆さん。『同行二人』と申すでせう。お婆さんの『ゆきたい』と京参りを望まれる一心、つれてあげたい、つれてあげたいと努力なさるお嫁さんの誠心が佛の慈悲にそだてられて、佛のおまもりを受けながら御本山参りがさせていたゞけたんですね。」

「有難うございます。」

じつと對話を聞いて居たお嫁さんも、兩手を膝に重ねたまゝ、今迄の苦しい營みを忘れて何かの満足を得たやうに軽く會釋して居た。「お婆さん、お念佛が唱へられますか。」
「はい、『死んだ伴が生きてゐる』と思ひます

と一層有難うなりました。」

「お仕合せですね、お念佛申して日を送るお婆さんやお嫁さんは、何時でも、何處でも亡くなつた方と御一緒ですよ。もうそろそろ時刻ですね、あわてることはありませんが、もう改札が始まるでせう。さあ、いきましょう。」

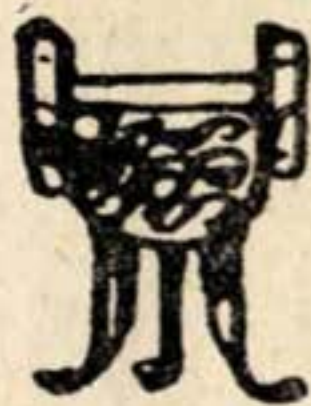
立ち上ると、マイクが改札の開始を報じた。いつの間にか私は老婆の手をひいて居た。乗船客が改札口に殺到し、可成りの混雑さであるが、老婆はおちついて佛のみ名を口づさみながら歩を運んだ。

「お婆さん、ではお元氣で!」「有難うございます。あなたさまも!。」

私は引いた老婆の手を婦人に歸し、二人の無事を念じつゝ船室を異にした。

間もなく「あきつ丸」は「螢の光」の曲に送られて大阪港をあとにした。私は、布教の旅で、こんな心のあたゝまりを覺えたことはなかつた。淨土宗義に流れる往還二想の安心「死んで更に生きる」尊さ、ひし／＼と有難さ身にしむものがあつた。(山城の古刹正法寺にて)

念佛の生活



山田鏡瑞

念佛を申し念佛を語る度に思はれます事は
常住坐臥念佛申し續けての生活をしておられ
る諸大徳の中、殊に熱烈なる人は、私の先輩
藤井實應先生であります。

藤井先生は毎月の様に浄土に寄稿しておら
れます事は讀者の皆さまはよく御承知の事と
存じます。

私は昭和廿一年四月、中支より歸還して直
ちに入山して以來、熱心なる佛教徒でお醫者
さんの馬場和光先生と二人で成城に求道會を
結成し毎月信仰座談會を開催して参りまし
た。當初は椎尾大僧正臺下始め、松浦一先生
佐藤賢順先生、渡邊蝶雄先生、故人となられ
た小西重直先生等、色々な方にお願ひしまし
たが、昭和廿三年頃より藤井先生に決めて定
例會と致して今日に及んでおる次第です。

集る方は浄土宗の方ばかりでなく、各宗派
の方で、最初は一般佛教のお話を願つていま

したが、回を重ねるにつれて信者の方が、藤
井先生の身を以てなさる念佛信仰の體驗に深
い感銘を受けられ、法然上人の佛教、念佛の
お話が中心となるようになりました。

毎月出て來られると必ず私の寺へ泊つて戴
くので、會場から寺まで廿五分位徒歩でかゝ
るのですが、先生は何の不足も申されず會話
してる時以外は必ず、低い聲で、靜かに、然
も安らかに、満足そうに、南無阿彌陀佛南無
阿彌陀佛と念佛を申しおられます。それか
ら寺に着いて休んでる間も、風呂に這入られ
る折も、寝る前も、朝目覺めて床を離れる時
も、同じ調子で念佛を申しおられるのです。

そうした先生の眞實にして、熱烈なる念佛
信仰が、各宗派の人々を一切念佛の一行に収
めて、求道會の前後數分づつ念佛を一緒に申
し、毎回和やかな内に終るのが慣例となつて
來たのであります。殊に先述の幹事をして戴
いてる禪寺出身の馬場先生方が進んで、一緒
に念佛申す事を提唱された程でした。

藤井先生こそ宗祖法然上人の御信仰を、一
枚起請文の御遺訓を身を以て實行されてる方
でもあります。

皆さま御承知の如く念佛生活とは一切の物
も心も生かし、一切を彌陀の大慈悲にお任せ

し、包まれて、本願を信じての感謝と反省の
生活であります。刻々を感謝で送る生活です。
如何に藤井先生が感謝の生活をなさつてお
られるかは、先生に接した方ならば、誰方で
もうなづかれる事です。先生は會話に中に、
「有難い事です有難い事です」とうなづかれ
ながら申されて何事にも感謝の氣持を持して
當つておられます。これこそ、念佛申し續け
られてゐる先生の生活からにじみ出て來る尊
い御言葉であります。

念佛が藤井先生の場合血となり肉となつて
脈打つて生きてゐるのです。念佛の中に先生
の尊い生活がなされてゐる事を深く感じられ
て、此の世に於て眞に救はれた生活とは斯る
ものであるかと、しみじみ感じさせられたの
であります。

念佛生活が如何に尊く、意義深く、有難い
ものであるかと、凡僧の私は私なりに、入山
以來十年、漸く昨今強く感じ、念佛精進の生
活こそ、此の世に於ける唯一の平和への道で
あるとの佛念を得たままに、藤井先生のお許
しも得ないで皆さまに念佛生活者である先生
の事をお知らせさせて戴いた次第です。

南無阿彌陀佛／＼／＼

信ずるは力なり

——芳村正義元中將のこと——



吉原自覺

昨秋増上寺にお授戒會があり、三日間の別行も満了した最終日に、書院で茶話會があつた。別行中の感想や所信を披瀝する懇親會であつた。會も終らんとする頃、温厚の一紳士は起つて次のように所信と希望とを述べられた。

一日も早く彼等に生命の繩を與へて欲しい、ならう事なら青少年に佛法愛樂の機縁を與へられたならば、將來社會の福祉、文化の向上に何程貢獻するか計り知り難い、佛教者はその行動に於ても、もつと積極的であつて欲しいとの底力ある話しであつた。

佛教關係の集ひには老人が多いが、こんな有意義の結案には、もつと青壯年を誘引して

繼て會も閉ち歸途門前の掲示板の前で——一合櫛は一合櫛、一升櫛は一升櫛、各々其の

分に應じ力一杯の事をなす處に眞生は開かる——の句をノートに記入する、先きの紳士に對し拙庵にお立寄をお勧めした。そこに居合せた前代議士武藤七郎氏も同意されたので、拙庵に請じ本尊前の小室で主客三名鼎座して暫し心置きなく懇談の花が咲いた。

私が「處で先刻茶話會席上の御意見は至極同感共鳴するものがありますが、あれにはもつと奥の院がある様に思はれますので忌憚なくお話を承はりたいものですと、切り出します」と、いとも乘氣に、積極的態度で口火を切つて、話し出でられたのであつた。

本來私は終戦前迄は軍人でありましたが、今は荻窪の商店街で書店を開いて居た書店の主人ですと申され乍ら名刺を差出された。元陸軍中將芳村正義です。私の郷里は奈良縣で家の宗教は淨土宗です。母親か篤信家であつたので、朝夕の佛前禮拜は子供へも強制的でした、別段悪い事とは思へませんでした。家庭の宗教的雰圍氣が不知不識裡に幼な心に滲透して参りました。長じて軍人を志し、幼年校、士官學校、陸軍大學へと進級して参りま

したが、其間趣味として佛典は勿論、宗教、哲學等に關する書を愛讀しました。

京都には永く滞在致しましたので、禪門の山崎益州老師に師事し約二十ヶ年許り辯道工夫致しました。

大東亞戦争も正に酣となり、命により現地に赴任致す事と相成りました折、益州老師は態々京都驛迄お見送り下さつた。大事到來し、正に生死巖頭に起つの時ですから、こゝで一番禪問答があるものと豫期して居りました處、格別の事もなく、發車間際に老師はつか／＼と近寄られ肩をぽんと叩いて、芳村さんあなたは觀音様の信者だから、觀音になり切るんだよ、とたつた一言申されました。この引導は今更の様に深い印象として耳底に残つた。さうだ觀音になり切るんだ、何者に優る驢の言葉を頂戴した、無價の寶珠である、これさへ念頭を離れなかつたならば、大命に生きる事が出来ること疑なしと、勇躍征途に就いたのです。

戦争は愈々酣となり、轉戦又轉戦、戦は吾れに不利であつた。難局より難局へと追ひ詰められ、今は進退の自由さへ失はんとして居

る。チヨイネス島に駐屯して居る頃は尤も懐慘であつた。身の危険よりも戦友の救援に心膽を碎いた。この島は右にブーゲンビル、左は遙かにガダルカナル島、正面にはコロンバノ島が横はつて居る。その島には一萬二千の將兵が置き去りを食つて居る。僅か五十海里の海峡で指顧の間にあるのだが、其の間に米軍の巡洋艦七、八隻、驅逐艦數十隻、その他潜水艦、飛行機等が群をなして、晝夜不斷の警戒には蟻の這ひ出る隙きもない。

幾度か參謀會議を開いて見ても結局救援不能の二字に盡きる。想へば一萬二千の戦友は飢餓と空腹に苦しんで居る。故國の父兄達幾十萬はどんな夢を見て居るであらうかと、彼れを想ひこれを考へて見る。いかでか不能の二字で諦める事が出来やうぞ、こゝに一瞬電光石火の如く煌き渡つたのは、觀音になりきれ、との驢の言葉である。

さうだ觀音は三十三身に身を變化し、水火も怖れず、苦毒も厭はず、大悲心に安住して苦惱の衆生を救ひ給ふ、よろしい共に觀音になり切つて戦友を救援しやう。戦争に勝つ事も大切だが、人命を救うことは更に貴いこと

だと次ぎから次ぎへと泉の如く湧き出づる、大悲心、大勇猛心、生死は既に超克して眼中にない、すべての責任を身に引受け、部下の將兵に對しても觀音のお守りを渡し、戦友救援の觀音にならうと説いてきかせた。

案ずるより生むは易く、夜陰に乘じ七十人乗りのボート百艘に分乗し、觀音部隊は救援へと乗り出した、かくして一萬二千人中一萬一千八百名の戦友救助に成功した。これといふのも偏へに大事到來に際し信仰による勇氣の賜物である。

ふりかざす^{やいば}刃の下は地獄なり

ふみこんでこそ極樂はあれ

昨日の地獄は今日極樂と早變りした。私は父母の恩寵により小時より宗教的氣分にひたり、念佛を稱へ、三十歳の頃入信し、五十才にして信念を身につける事が出来た。全く父母祖先天地の大恩大力によらずんばなし能はざる處であります。

こんな意味で青少年に一刻も早く信仰への導入を希望した次第です。

と、その信念の程をひききされた。

まことに、宛然言々句熱血の結晶の如き感

を覺えた。

まだ申し残りがある様子ですから更に追究しますと、

「まだあります」とて、時の經つのも忘れるかの如く、話をつづけられたのであつた。

南方から歸つて廣島の師團へ赴任した。不幸にも原爆の洗禮を受け、多くの市民と共に一人娘を喪くしました。部下達は寧日なく熱心に行衛不明の死屍を探索して呉れた。中々見附からない、或日妻に向つて今日は一日捜すやう申付けました。妻の氣持では多勢の若い人達の力ですら發見出来ないものを女一人では詮方なしと思ふたらしいが、夫の命と母性愛から捜す可く家を出た。不思議と言はるか、偶然と申さうか、思ひ掛けなく或る場所に参りますと、河の中から生けるが如き姿で引揚げられて居る娘の死屍に邂逅した、水月感應、父子相迎の活ける體驗を致しました。終戦となるや、廣島へ参り引揚部隊のお世話に致す事となりました。こゝでは、勝者と敗者との頽廢的様相をみせつけられました。英米等の勝兵達は、敗れて歸る者の、手から懷中から勝手次第に、金品等を沒收するのであ

つた。弱者の悲しさ勝者の前には一言もなく泣き寝入りの態である。周圍も官權も矢張り見て見ぬ振りするよりより外はなかつた。活ける信仰のない悲しさである。

徒らに悲憤慷慨しても無駄である、止むに止まれぬ私の良心は、今こゝにも無上命令を出した。助手一名を連れ米側の指令官に面接をもとめた。敗戦を契機として日米は永久に親善を増進せねばならない、今こゝに上陸する部隊は日本全國に撒布するので上陸勿々貴重金の品を沒收され、人格を侮辱せらるるならば、弱者、敗者の悲しさ、今は抗議も出来ないかも知れぬが、それだけ内訌するものは深刻である。日米親善の防衛ともなるからこんな場合勝者の權利の如く振舞ふ醜態を斷然止めさせて頂き度い。かゝる事が續いて行はれる事ともなれば貴下並に貴隊の不名譽ともなりませう、どうか嚴肅な監督を切にお願申す次第である、之れに反し日本側に不正不義の點がありますれば私は責任を以て改めさせていただきますと説いた。

言葉柔らかな中にも熱誠溢れる力強い態度に米側の代表者も能く理解して呉れて、嚴

重な命令を出した。一週間も經つと殆んどなくなつた。十日たてば全然跡形もなくなつた。善事惡事千里の譬への通り、鹿兒島上陸部隊の情報が遠近に傳はるや、上陸は鹿兒島という事に代つた。東京で全國知事會議が催された時、各縣知事達は、引揚部隊の好評に讃美の言葉を放つた。地元の知事は東京で初めて知るといふ振合で、歸縣早々私の處に知事自らお禮の挨拶に見えました。信ずるは力なりと再び痛感しました。

引揚任務終了すると、無職の舊軍人は生計の道を樹てねばならぬ、多くの部下の中には會社關係の者も、地主關係の者もあつた。或者は會社の顧問になつて頂き度い、或者は土地を無償で分譲するといふ風に、親切に言ふて呉れる者もあつた。親切には泣かされたが、獨り一身の安易を計ることは反省されねばならぬ。

引揚げ部隊に對しては、日本は敗けたが、國は亡びない、民族の將來はこれからである。勝敗は時の運、敗れて心まで喪失してはいかぬ。禍を轉じて福とするのも、これから吾等の心構へ一つである。健全なる精神は

健全なる身體をつくり、健全なる國家社會を創造する、一心協力、大いに覺醒して、國家の再建に協力邁進しよう……と、勵ました手前、到底左様な親切の大樹の下に雨宿りしてはならない。

又信念あるものとして左様な振舞では出来るものではない。斷乎として辭退し、所有する宗教、及び哲學等に關する五千冊の書籍を賣り、十萬の資金を得て、鹿兒島で書店を開く事となつた。

營業の綱領としては、第一、問屋に迷惑かけぬこと、第二、最低生活に甘んずること、第三、納税すること、この三綱目を主義として取り敢へず間口一間奥行二間のバラックを建てた。店は日々繁榮し、かごしま市第一の書店となつた。間もなく五間の間口に六間の奥行ある家に代つた。そこで長男と妻に任せて單身上京する事となつた。

東京には知友多く、又祖先の墳墓もあるもので、かごしま市に於ける信用を以てすれば、東京でも屹度成功するものと信じ、荻窪の商店街に開店する運びとなつた。此處も亦お蔭により地方隨一の書店となり、今は其の餘力を横須賀に延長し保安大學前に支店を開店し

た。東西相並んで店運隆盛です。信念に生き働く處には、如何なる難關も打開されゆくものと信じ、協同社會創造のため不退轉の精進を續ける積りです。

書評

藤吉慈海著

現代インドの宗教

著者は知恩院山内樹昌院住職であり、佛教大學京大、尼衆學校に講師もし篤學の譽高い。此は、昭和二十六年九月から二十八年十一月までにインドとセイロンに留學しインドの宗教を研究した著者の肩のこらな報告であつて、「印度セイロンの宗教」と「インド通信」との二篇よりなる。セイロンにあつては、沙彌として二十日、比丘として雨安居の三月を過した珍しい體驗を持つ氏の筆になるだけに、體臭のするインド宗教が如實に出てゐる。又、佛教がインドの現實にどうあるかという點でも、そうとう、日本佛教徒の錯覺を取り除いてくれるだろう。そして「大乘佛教は墮落した佛教だ」という觀念がテラヴァダの人たちによつて植えつけられていいますので、その復興は前途なお程遠く感ぜられます。しかし出家教團というより在家教團に近い日本佛教の在方は南方上座部系の佛教徒よりも反つ

話は連綿……とるゝ語りつづけられ、そして盡くる處を知りませんでした。

信仰を無上の力として精進される氏の話をそのまゝに紹介致しました。

てインド教徒の間に共鳴者をうるのではないでしようか。」という見方も注目すべきであらう。(B6、一七四頁、京都、其中堂發行、二百圓、送料二十圓、御希望の方は本會へお申込み下さい)

山崎安雄著

人情記者失格す

毎日記者山崎氏の近著で、その片鱗を本誌五月號に執筆して頂いたので、大方の内容は御想像出来ると思うが、文字通り人情記者が、世に傷けられ、愛に飢え、病に苦しむ人々のために、多忙の寸暇をさいて、力となり、看まもり、光を與え、資をも苦必するといふ人情味あふるゝ一本である。「失格」とはどういうことか。著者は、これらの記事は目下進行中なので、續を書きたいが、題して「續人情記者失格す」か、「合格す」となりますかねーと云われた。本會々員として、同書の中の「師文と仰ぎは」て吉田絃二郎先生のことか述べられてあり、一讀をおすすめる。(B6、二二五頁、東京都文京區高田豐川町六〇、法學書院發行、百八十圓、二二四圓)(眞野龍海)

愛情は母の心もて

白 幡 静 憲

若葉の薫風さわやかに外氣のあたゝかい初夏の微風が流れてはゐるが、この部屋は固くとざされて、約八百餘人の瞳が異様に光つてゐるのが變つた風景ではあるが、その多數のまわりは武裝した看守にとりまかれてゐるのだ。朝の教悔説教である。けふは佛心と愛情について、むづかしい理くつを抜いて、タンタンと話を進めた。

「私にも子供はゐるが、子供たちは毎日學校から歸ると必ずお母さんただいま……と云

ふけれど、お父さんただいま……とは云つてくれない」と云ふと、みんなクク、と笑つてゐる。母の慈愛と云ふことにふれると、八百の人々は異様な一つの波を起したやうにゆれてゐる。みんな、それぞれに母のおもかげを偲んでゐるのだ。

説教が終つてから、例によつて希望者だけの個人面接教悔をやる。けふは三人だけである。三人目に會つた人は京都の出身で初犯の人だ。専門學校を出て公文書偽造とサギで擧げられた。京都には母と兄夫婦がゐる。私の前で正坐して黙して語らず、唯、下を向いておちつかぬやうである。

「君はこゝへ來てからお母さんのことを考へたことありますか」

私の質問が終らないうちに、彼はワツと泣き出してしまつた。故郷のこと、母のことなど云はれると、こゝの人たちはみんなしんみりとなつてしまふのだ。佛心、大慈悲、愛情など斷片的に語るうちに、彼の苦しみを訴えてくれた。それは、彼が罪を犯して以來、友人も知人も、更に兄も母までもが、何人となぐ彼を他人扱いにするやうになつた。こゝへ來て七ヶ月にもなるのに、母からは一度の便

りすらないのだ。こんなさびしい氣持で、これからもこの苦しみと闘ふことはとてもやり切れないことだ……。彼は全身をふるわせて私に叫んでゐる。私は持ち合せの粗末な念珠を彼の手にかけて「母と思え」と與えた。私は京都の母に手紙を送る。そして彼に念佛と安心を説く。約二ヶ月後に京都の母から私宛に手紙が届けられた。その一節……

わたくしはあの子を忘れたものではありません。忘れるどころか毎日毎日心を痛めてあの子の強く生きることのみ念じてゐました。あのやさしい子が、あのやうな罪を犯したことにびつくりしてしまつて、長い間私は私の心の亂れをしづめるのに努力しました。私は先生のお手紙を拜見してやつとおちつきを見出し、狂わんばかりの愛撫の便りをあの子に差出しました。どうぞこの母をゆるして下さい。あの子は、わたしからの手紙を得てから一日と明るい心の平和をとり戻して、先生から頂いたお珠數を母の姿と思ひ高聲念佛を唱えて心靜かに明るい世の中へ出る日を待つてゐるとのことです。そして、阿彌陀様のおみちびきを深く信じて、安らかに暮して居ります。ほんとうにありがたいことです……云々

これは横濱刑務所における私の最近の當面した話である。

力と信仰



中村賢

あの恐しい水爆が戦争の用具に使かわるるようであつたなら、地球上の生物は全滅する外はない是れは春秋戦國時代のように各々が力を以て立とうと思ふからである。

源頼朝は力で平氏を覆滅したけれども、自分の目的が達せられると弟の義経を殺し、又の蒲の冠者範頼を殺したのみならず、叔の新宮十郎行家叔父の子である木曾義中、娘大姫の婿である清水冠者も殺して仕舞つた。傳説によると建久九年相模河の橋供養の歸りやまとの原で行家、義経の亡霊が出て頼朝と眼を見合せた。それから頼朝が患ひ付いて次の年正治元年に死んだ。

ソ連ではスターリンが政權をとつて以來、

最高幹部約二百名の内銃殺せられたもの百六十余名の多數に上つたと聞く是も力で自分の地位を保ちたいからである。

力の無い羅馬法皇は時に盛衰があつたが、今まだに連綿としてつづいて居るは、最初色々の迫害にあつても人類救済の目的を以て出發したからである。

力のみを頼りとしたものは幸に自分一代だけは無事であつたとしても永つづきはせぬものである。世界の歴史をみれば明かである。

秦の始皇帝のように力で天下を統一して、自分を始皇帝と云ひ、二代三代は勿論萬代にも子孫を皇帝と稱することにした。初めの間はよい政治を行つたが、晩年には焚書坑儒と

云つて天下の書物を焼き儒者に生きながら穴に埋めてしまい、自分は不老不死の薬を求めゐる爲めに家來を蓬萊へ出した。今も和歌山縣新宮市にその家來の徐福の墓と云ふがある。そうして自分が死んだらすぐ住つて居つた宮殿は焼かれ、墓はあばかれてしまい、只一つ残つたものは有名な萬里の長城だけである。

熊本市甲府市などの人は三百年後の今日でも加藤清正のことを清正公、武田信玄のことを信玄公と言つて尊敬して居ることである。なにか當時の人々が心から尊敬していた名残であると思はれるのである。

堅い信念は宗教的信仰が無ければ持ちこたへることが出来ぬ。

戦國時代出雲の尼子氏の十勇士と云はれる中に山中鹿之助幸盛と云う人があつた。尼子氏滅亡後も兼興を心がけ苦心降膽したが、遂に其目的は達せなかつたが、敗軍の將鹿之助の墓は幸盛寺と云う立派に残つて居る。鹿之助は常に三ヶ月さんを信仰して「うきことの尙その上につもれかしきりある身の力ためさん」と詠むだとの事である。

中谷宇吉郎氏の法隆寺壁畫模寫の談の中に森田沙夷さんは、天女を描いて見て恐ろしくなつたと言つてゐた。指一本でも、澤山のデ

ッサンをして、その中から一番良い線を選んで描いたものにちがひないので、どんな天才でもとてもぶつつけに描ける畫ではないさうである。あの壁畫の隅から隅まで、餘りに精根をつくして描いてあるので、模寫をしてゐながら、時々人間の魂の高さに思はず頭が下がることがあるという話であつた。この壁畫を描いた人は宗教的信仰の堅い人でなければ出来る仕事ではないことが想像せらるるのである。

淨土宗の僧ではないが、鍋かぶり日親の、ようなどんな迫害に遇ふても屈せずたゆまず目的を達した人もある。京都市本妙寺の開山で法華經の功徳を高唱し、自分と亦法華經の行者たる信念を有した、其の布教のやり方は日蓮上人とよく似て居る。日蓮上人が政治の中心である鎌倉幕府を信仰せしめんとしたように、日親は足利幕府を信仰せしめんとした。將軍足利義教の怒りにふれ室町の獄につながれた。その一年半ばかり、夏の炎天に周りに薪を積み火を放ちてその中に座らしめ、冬のさむい夜には裸にして樹にしばり水をかけては鞭で夜明までたゞき、其の他水責、火責等獄卒がひどいと思ふようなせめくに遇ふても一晩の内に元氣を恢復し本の通りとなつた。

義教は益々怒て鐵の鍋を焼いてまつかにしたときに日親の頭の上にかぶらしめたが、日親は合掌して靜かに題目を唱へ鍋の冷えるまで少しも動かなかつた。幕府の役人も恐ろしがつて、日親に歸依する者もだん／＼多くなつてきた。義教は憤悶して獄中に使をやり法華經には法華教の行者を惱す者は嚴罰を受けると書いてある。我れおまへを苦しめること一年余りであるに我身には少しのさはりが無いこれは法華經がうそであるかおまへが法華教の行者でないのか、どうじやと詰問させた。

日親はかたちをあらためて經文に何でうそがある、我は法華經の行者である、將軍が嚴罰をのぞむなら三年たゝぬうちにきつと禍がくるであろう、と云つた。義教は笑ふて三年もたつて禍してもそれはおまへを苦しめたむくいかなにかわらない、と嘲けつた。日親は三年は遅いか、そうか、それでは百日の間に嚴罰がくる、そのとき後悔してもしかたが無いぞ、と云ふた。將軍はなに云ふかと氣にためなかつた。不思議なことには日親の豫言したその日より九十九日目に義教は家臣赤松滿祐の爲めに殺された、時は後花園帝の嘉吉元年六月であつた。

幕府の連中は、自分らも嚴罰を受けては大

變だと俄かに日親を赦して獄から出よと云ふたが、日親は出ないと云う。私が生命を捨てゝかゝつたのは將軍を正しい教に歸依せしむる爲である、もし私に罪がない事がわかつたならなんで法華に歸依せないのかと詰問した。幕府は百方陳謝し將軍の近親を日親の弟子としてやつと獄から出してもらつた。最後に法然上人の事蹟について一言話しましょう。

後鳥羽上皇の官人鈴虫、松虫が法然上人の弟子の住蓮房、安樂房に歸依して法となつたが根源となつて後鳥羽上皇の逆鱗せられたを時來れりと南都北嶺から念佛停止、源空重科の件を持ちこんだ。朝廷に申上げ遂に源空を流罪にきめてしまつた。法然上人は出發の日までふだんと少しもかはらず念佛を唱へて居られたので、弟子の西行上上が世間がうるそうございますからお念佛は當分おやめになつたらと申しますと、上人はたとへ死罪に處せられてもお念佛はやめんと申された。

力のみで生きて居た人と宗教的信仰で生きて居た人の事蹟を二三書いて見たが今の世の中にも當てはめてみるも面白い。國會の亂闘宗教を喰物にする宗教など、さまざまのものがあつた。考へさせらるることが多い。(本會會員)

帥 繪 顔 似

泉 湛 田 鶴

上人の眞影を畫かしめられた。その頃、後白河法皇に仕へ寵を得てゐた右京權太夫藤原隆信は、似顔繪（肖像畫）の巨匠として最も世に顯はれてゐた。

畫を土佐光長に學んだ隆信は、それまでの一般的な佛像畫、風景畫から一步進んだ具體的な個性的な肖像畫の先驅者として名を馳せ源賴朝、平重盛、僧文覺、源賴政の畫像も彼の筆になつてゐる。又歌人としても知られ詠じた歌も極めて多く、其の風格も非凡なものであつた。物語作家としてもすぐれた才能を持つてゐて、今は傳らないが、「彌世経」「うきなみ」等の作品があつたといふ。

この時代は、歌人として俊成、定家の父子を初め、家隆あり寂蓮あり、皆一代の巨匠として歌壇に雄飛し、西行、長明寺輩出して歌道の隆昌も極に達してゐた黄金時代であつた。

かの水無頼殿の歌會には、屢々これらの巨星を招いて華かに催されてゐたのであつた。隆信は、これらの人々と交りがあり、各所の歌會に席を列ねて、いたるところで名を馳せてゐた。

俊成卿の養子となつた中務少將定長は、俊定の弟、阿園梨俊海の子で、幼にして歌才がすぐれてゐたので伯父俊成の養子となつたが定家が生れたゝめ生家して寂蓮と稱した。寂蓮は、西行長明と並び稱されたが、隆信も、若い頃から隆信定長と並び稱され世に聞えてゐた程、歌才に秀れてゐた。

隆信のみでなく、彼の一族は、擧つていづれも文學藝術の才に恵まれてゐた。

その父祖も歌道の先達で、父の爲隆は大泉三寂の一人であり、長門守より累進して鳥羽院のとき美福門院に仕へ、皇后宮少進となり和歌に秀で後葉集の撰者となつた。母は、若狭守親忠の女で、同じ

法然上人が、後白河法皇の勅請によつて、法住寺の御所に於て一乘圓戒をさづけ申し上げた時、法皇は御信仰のあまり隆信に命じて

く美福門院に仕へ女房賀と稱し、爲隆の妻となつて隆信を生んだが爲隆が通世したゝめ離婚して歌人五條三位條宗俊定の後妻となり、二條家の中心女性として歌壇の星と輝いた。だから、新古今の歌聖とまでいはれる定家と隆信とは、母を同じくした異父の兄弟の間柄である。

子の信實は、父にまさつた肖像畫の名手として知られ、三十六歌仙圖は最も有名であるが、水無瀬宮に藏されてゐる後鳥羽天皇の宵影も彼の作であると傳へられ、又、父に劣らぬ歌人でもあつた。

信實の妹には、難波内侍と土御門少將内侍があり、いづれも歌人として知られ、閨秀肖像畫家として有名な承明門院右京太夫は末妹である。建春門院中納言日記を書いた建御前は俊成の娘で、同腹の兄妹である。

二

隆信にとつては浮世の荒波は、ゆりかごの中から早くも押し寄せてゐた。

父の隠棲にあつたのは、彼の二才の時である。西行の心友であつた父の爲隆は、西行の世を捨てた生活振りに憧れを抱いたものか、近衛帝の康治元年、一子隆信が生れると、翌二年大原へ隠遁してしまつた。父が寂超と名乗つて妻子をすてゝかへり見なかつた後は、年若い妻の加賀は、嬰兒を抱いて暮さなばならなかつた。けわしい世にあつても母は、節操を堅固に守つて隆信の生長を楽しみにして暮してゐた。

當時、歌壇の重鎮であつた俊成は、妻を相次いで死別し生別してゐた。容姿圓麗な加賀の歌才に動かされてしきりに求婚してゐたが

肯ぜなかつた。加賀への深い思慕の情を寄せてゐた俊成の久しきに亘つての熱心な求婚に動かされたのは、母の三十才位の時で、約十年余も寡婦として隆信を育て來たのであつた。再婚してからは、隆信は俊定の庇護を受け祖母に養はれてゐた。

やがて、俊成との間に、成家、定家を始め八條院三條、同院按察等數人の女子がつぎつぎと産れて來た。

それにしても、慈母にこの世ながら幼にして生別するといふ人生の悲惨事は、多感な隆信にとつては、心の大きな痛みであつた。まして、其後建久の初め三年間ほど、母子の間に隔意が生じて仲たがひとなつて、相逢ふことも、互に語ることも出来なくなつたことは一層心寂しさを與へたが、さすがに恩愛の情は斷ち難いものであつた。別れて疎遠となつてゐても、母と子とのつながりはあつた。母にはげしい情愛を抱いてゐる隆信は、母への思慕は一刻も止まらない。母と逢ひたい。語りたいと、心にもだへ悩む彼であつた。余りのもどかしさに堪へかねて、一思ひに母のことなど忘れやうとしたが、ますゝ母のことが、胸深く彫り刻まれて來るのであつた。

余義ない事情で相逢ふ事が叶へない日が、三年余も續いた。隆信にとつては、鍊獄の苦しみにもまさる月日であつた。ふとした事から、互のわだかまりも解け消えて、晴れて對面出来るやうになつた事は、隆信にとつて、どんなに喜ばしたかも知れない。が、夢にまで見た母と會ひ得た喜びも、全く束の間で、その年の建久四年の春立ち初めた二月十三日、母は七十を一期としてはかなくみまかつてしまつた。

既に、隆信は五十二であつた。異父俊成も八十に達し、母との間に生れた成家も三十八、定家は三十一となつて歌人として名聲を博

してゐた。

隆信は、母の死に逢つて、五十すぎた男のやうにもなくなげき悲しんだ。

純情な彼は、多年の志を遂げて最後に仲よくなつて、僅かの月日でも心のまゝに母に仕へることが出来得たことに、無上な喜びを感じてゐた。それ故、今生で幸にも再會の縁を完うして、母の喪に服することの出来たのは、尙母子の契の深きによるものと思つた隆信は、後の葬送や法會なども、異父弟の成家、定家と共に、いとねんごろに營んだ。

一族、喪に服してゐる中にも隆信の日々、一しほ哀れに映つたのは母の寵を一身に受けてゐた定家が、長病のため慈母の看病も出来ずに母の喪に遭つたことを、なげき悲しむ姿であつた。

長い間、あれほど慕ひこがれ、再會を待ちこがれてゐた母に、もう二度と逢はれぬと思ふと、隆信の胸の杯に、押へこまれぬ悲のみがつきあげて来るのをどうすることも出来なかつた。

三

更に、母との死別にもまして隆信の心を病めたのは妻との死別である。

彼の妻は、中務少輔長重の娘であつた。似繪の名匠として又、歌人としても名聲を馳せた隆信に嫁して、限らない愛を夫に捧げて楽しい家庭を作つてゐた。ところが、ふとした病に、妻は夫の手厚い看病もむなしに、六つの隆範を頭に、隆兼、信實、猷圓のほか數女をのこしてみまかつた。

幼にして母との生別の悲しみを深く味つた隆信は、今又、若かく

て美しい妻と死別する悲運に逢つたのであつた。親子のやうに違ふ若き妻に、こんなに早く死別するとは夢にも考へない事であつた。

憂き世とは誰がいつたか。夢うつゝの思ひで、觀音寺の片の山におくつた隆信は、その山の麓の柴の庵に、形の如く七日七日の作法なども涙の中に營んだ。長月の二十日頃で、早や冬の景色ともなつて、峯を渡る嵐の音も、いともの悲しく聞え、胸も張りさけるやうな悲しさにつつまれて行くのだつた。

その頃の習慣として、服喪中は常服として變つた色の衣服を着る作法の日などは、とりわけ悲哀の想を増させたものか、

「いろを染むるにつけて、我こそ先だちて着すべき色を、定めなき世のならひと云ひながら、親子のよはひなる人々をしらされて、かく染めつる事も、なほつきせぬ心地して」

と、妻への愛執の念の強かつた隆信は、樂しかつた日を追想して不運な自分と、心も萎へたやうに述懐してゐる。

幼い時、母に死別する程、子にとつて不幸はないが、又、幼兒を抱へて妻に先立たれることは、更に哀れである。何しろ、長男の隆範はやつと六つである。信實はまだ二三才である。匍ひ廻つてゐるものや、乳を求めて泣く綠兒さへある。頭はない子供等は、母の逝つたことを知らないで、無心に戯れ遊んでゐる。

時には、駄々をこねて父を困らせる事もあつた。そんな時、ほと／＼途方にくれてしまつて、何故、子供等をすてゝ逝つてしまつたのかと、亡き妻を怨みたい氣持さへ起つて来るのであつた。

この世は、かくもまゝにならぬものか、何の宿業か、この子供等も自分と同じやうに、母の愛情を知らずに淋しく育つて行かれる運命にあると思ふて、あな不憫なと、泪をそゝるのであつた。

涙のうちにその年も暮れ、翌年の春を迎へて、梅の花がちらほら咲き初めて來た。

南面の梅の木は、昨年の春、妻が自分の壽命の程も知らないで植えさした思い出深い木であつた。早くも今年は、ふくいくと咲いてゐる。

明けて七才になつた隆範が、咲き出た枝を折り取らうとする姿がふと隆信の目に映つた。

又、いたずらが初まつたか、と思つてゐると、彼の許につかゝと走り寄つて來て、

「父上、きれいでせう」

と、小さな一枝を、かざして見せた。

「ウウ、美しいのう」

「この花を母の佛に手向けて下され」

と、子供ながらも心の裡に母戀しさの念が一杯なのか、しほらしく告げた。

頭はない隆範の言葉に、ハッと胸をつかれ、

「おゝ、いちらしい言葉ぞ」

と思はず引きよせて抱きしめた。

一しほ清楚な花の中に、亡き妻のおもかげが偲び出され堪へ難いまでに心を傷ましめたのか、彼の目はきら／＼光つてゐた。

妻の佛を追ふて思慕の情こまやかであつた隆信は、梅の枝に

墨染の袖こそあらめ梅の花

かわらぬ色をみるさへぞうき

と、一首を結び付つけて、ちつと合掌してゐた。

四

保元の亂が起つたのは、隆信の十五歳の時であつた。逸樂を奏でた管絃の響は、矢叫びの音と變り、殿上人は、蹄の音、太刀打のひびきにおのゝき恐れた。太平の夢破れて京洛は忽ち修羅の巷を現出し、父子兄弟、相分れて戦ひ、叔父、甥互に殺傷し合ひ、世は名利を追ふて競ひ争ひ、人倫の紊亂極度に達したのであつた。

保元の亂が治つたと思う間もなく、三年にして平治の亂が起つた。

世相も以前と異つて、上下の社會に著しい變動を見るに至つた。

今まで地下人として輕じられてゐた武士が擡頭して、公卿の威勢は日に日に衰へ、これまで政權を專らにしてゐた藤氏一門の勢力は見る影もなく、やがて世は平氏の天下となつたが、それも暫くの間で源平と別れて争ふに至つた。壽永四年、平氏の榮華の夢はかなく消えて、全く源氏の幕府に歸してしまつた。

昨日の勝者は、今日は敗者と變り、轉々として殆んど想像を許されぬ形勢である。この中にあつて殿上人の地位は、至つて不安定極まるものであつた。不安を抱き現世の希望を失ひ、前途に對する絶望なる嘆息を吐いて、出家遁世する者も少しはなかつた。現世に志を得ぬものは、自然を支とし、歌の中にせめてもの慰めを求めてゐたのであつた。

殊に、その頃の縉紳の常として、晩年に出家遁世する風習があつた。

隆信の父爲隆も、出家して寂超と號して大原に隱遁してゐたが、父の兄である爲業、頼業も、皆出でて大原に遁れてゐた。爲業は寂

念と云ひ、賴業は寂然と號して三人共に歌人として聞え、人呼んで大原の三寂と稱してゐた。

洛北大原は叡山横川の谷に近く、その昔、惠心僧都が、この地に教を布いて以來、良忍その法統を傳へて、念佛行者の靜閑な修道地であつた。

この外、一族、隆行、定長（寂蓮）等も皆世を捨て、大原へのがれてゐた。

是等の人々と隆信とは一族として又歌人として、交りを厚くしていたのはいふまでもない。彼は、あらゆる人生の悲慘をなめ、傷心を抱いてはゐたが、遁世はしなかつた。

日頃、法然上人に私淑してゐた隆信は、念佛によつて生きる道を知つてゐたからであつた。

この世の悲しい出来事は、それはどうもがいても、どうにもならない世の實相なのである、隆信には、いらぬ事に、とやかく傷心するよりも、もつと自分を磨くべき道が開かれてゐたのであつた。見えない如來の攝理が、いま現に自分に働いてゐることを仰いで喜んでゐたのであつた。

如來を仰ぐものにとつては、この世に起るさまざまの出来事の中でも、どんな逆境にあつても自棄にならないで、心には少しの苦惱もなく、大悲に安住することが出来る。

自分の上に頼るところを見出した自己の眞實の把握、これが如來の本願力をうけとる姿といへよう。

藝術家隆信にとつては、歌で自己の生きる天地であつた。畫道の中に、眞の自己を見出してゐた。

如來への大きな渴仰を抱いてゐた隆信にとつては、念佛を出發點

として、新しい生活に入つてゐた。

思ふに、法然上人の念佛の教へは、人生尊重であつて、自己の目ざめであり、念佛によつて本ものゝ目を開くにある。念佛によつて人生の意義を見付け出し、世の實相をつかんでの眞の人生の把握であつて、云はゞ限りない自己の生長、創造なのである。念佛は、希望と新しい生活力をもつものであつて、興へられた自己の立場に素直にふるい立つことにある。念佛を一念一念と、一刻一刻と、現在の自己の今を活かすことゝ受けとつてゐた隆信は、上人からの聞法によつて、彼の藝術は一層磨かれ、更に深められて行つた。

當時、多くの歌人は、題によつて自然又は人事を想像にまかせて詠じたものであつたが、隆信の歌は、生まゝくしい自分の経験を歌つたものであつた。彼の歌は、社會を眺め、人生を感じ、自己の境遇を内視して、家庭や環境の變遷を訴へ、個性の力強く現はれたものとなつた。

彼の畫も、個性あるものとなつて、新しい手法で表現し、新鮮な感覺をもち、日本肖像畫の新時代を形成することゝなつた。

上人に深く歸依してゐた隆信は、建仁元年、六十歳のとき、髪を下して出家を遂げ、戒心と改めた。其の後は、専ら念佛一行を行ひすましてゐた。

その頃の心境を、

六十路あまりまた見ぬ程に澄む月は、

いへを出たる光なりけり

と、一首に托して、阿周梨信憲の許へ、この世を生きる眞の光を見出したむせぶやうな悦びを告げてゐる。

施本に

浄土トラクト

B6
十六

竹中信常著

正信へのみちびき

現下新興宗教の功罪を論じ
そのヒロポン的病根を鋭く批
判すると共に、正しい信仰の
あり方を適切に指導する。

藤井實應著

一枚起請文

法然上人の全信仰の結晶た
る一枚起請文をば、懇切に解
説せられてある。

法然上人讃仰會編

信徒必携

信者として之だけは心得お
くべきことがらが、教義から
行事作法に到るまで明示され
ている。

定價一部十圓、○十部以上八
圓、送料十部毎八圓増○五
十部以上七圓、送料五十圓
○百部以上送料當方負擔

芝園だより

○本號は吉田先生にはお休み頂い
に。

佐藤賢順先生の宗教入門は、各
層に好評で、其後、文化放送に先
月より今月初めにかけて、又、N
HKよりは、本月六日、放送され
ている。

○私共の幼稚園の近くにパークホ
テルのあるせいか、近頃外人がち
よい／＼やつてくるが、此間、タ
イの文部省の人が来た。同じ佛教
國だから、なんとなくしたしみを
覚えて案内したが、役人らしく、
在籍、經營、サラリーといった事
の質問が多かった。毎日のおつと
めには大いに關心を動かしたよう
だが、古びた寺の建物と明るい園
舎とのつり合いが、彼等には逆の
ようで割り切れぬといった感情を
示し、この寺は妻帯が許される
のかという質問までして、大そう
首を傾げていた。南方と北方の差
である。今度、近藤正也君等が、
南方佛教の比丘生活を志して出發
されたが、學ぶと共に、大乘北方
佛教の行方も何等かの形で彼等に
示してもらいたいと思う。佛教の

原始の形を保存する點に學ぶべき
も、又、發達の形に於て、彼等に
知ってもらふもの大なるものがあ
ろう。この交流から、一つの佛教
として新しい生命が出て來はせぬ
か。目下の所、油と水と云つても
いいかもしれない。

○ハワイの宮本文哲師が此程三十
何年ぶりに歸朝され、各方面で講
演をなされている。

○本號では豫告の如く、布教師各
上人より、世に顯わしたい佛教者
の紹介を主として、それ／＼御執
筆頂いた。もとより、之の數は氷
山の一角にもならないのである
が、今後も會員の方から、いつま
でも、こういったふうに誌上に御
紹介を頂いて、一同、精進の資と
したいと思ひますから、御投稿を
お待ちしております。

○芝の西應寺(北條淨善氏)では五
月幼稚園増築をしたが、更に、鐵
筋コンクリート建本堂に着手され
同じく大崎隆崇院(竹中信常氏)で
も本年一杯に千萬圓の豫算で近代
的本堂が出来る由。檀那寺は、こ
うしたコンクリートビルにより、
永久に火にも水にも變らぬ子々孫
々未代の歸依所となる事は、それ
自體に大きな意義がある。

(眞野龍海)

會費(誌代)

半年二〇〇圓・一年四〇〇
圓です。前金切の節は、精算
通知を致しますから、折返し
御送金下さい。御送金は便利
で安全確實な振替を利用して
下さい、千圓まで二五圓の手
數料で且、通信も書けます。
新しい市は必ず縣名を、又、
新規か繼續會員かを明記して
下さい。

「浄土」 六月號

昭和十年五月二十日
第三種郵便物認可

昭和三十年五月廿五日印刷
昭和三十年六月一日發行

(定價三十圓)

編輯人 竹 中 信 常

發行人 佐 藤 密 雄

印刷人 春山治部左衛門

印刷所 共立社印刷所

東京都品川区上大崎一ノ七八三

發行所 法然上人讃仰會

振替 東京八二一八七番

特價奉仕

- 一、寺院用佛具類一式
- 一、在家用佛壇、佛具一式

多少に拘わらず御用命或は御紹介下さい

東京都江東區深川三好町一ノ五長專院不動寺脇

區役所前

正本堂佛具店

電話深川(64)五八四八

團體宿泊御案内

- 一、當寺本堂庫裡再建完了しましたので五十名位までの團體宿泊を實費で引受ます。

東京都江東區深川三好町一ノ五區役所前

長專院不動寺

正 本 實 乘
電話深川(64)五八四八

幼稚園 保育園 運動遊具

全國幼稚園・保育園・小學校・各團體に、良品を廉價にのモ
ットで、堅牢安全な遊具を納入好評を頂いております。松竹
・光明・芝・明照等の浄土宗幼稚園採用。



篠澤鐵工所

東京都大田區堤方町718
電(75)1024(池上驛東3分)

(五月より若干定價が變ります)

鎖ブランコ2人乗	¥ 12,000
鎖ブランコ3人乗	¥ 14,000
鎖ブランコ4人乗	¥ 22,000
鎖ブランコ6人乗	¥ 26,000
椅子ブランコ4人掛	¥ 13,500
太 鼓 橋	¥ 10,000
ジャングルジム中型	¥ 28,000
單式滑臺中型	¥ 23,000
復式滑臺中型	¥ 36,500
動物付き遊動木	¥ 30,000

此他各種、一報カタログ送

配達實費(都内横濱500圓以内
其他1000圓以内)組立無料。

小田原・熊谷・土浦以遠は丸通
送り、(荷造費當社・送料着拂)
組立説明書送付